

## ビワパールの再生に向けて

伴 修平  
環境生態学科

琵琶湖における真珠養殖は、昭和5年にイケチョウガイを利用した淡水真珠養殖が成功したことに始まる。最盛期（昭和40～50年代）には年間6,000kgを超える生産量があり、生産額が40億円／年を上回ったこともあった。ビワパールと呼ばれて親しまれ、日本だけでなく広く世界市場に流通していたようだ。生産地では「真珠御殿」がたくさん建ったと聞く。しかし、昭和50年代後半から真珠母貝であるイケチョウガイの成長不良や原因不明の斃死が相次ぐようになり、同時期に中国産の安価な真珠が出回るようになると、ビワパールは市場での競争力を急速に失い、生産者は次々に廃業を余儀なくされていった。昭和43年には滋賀県全体で93経営体あった真珠養殖業者の数は、平成に入ると30経営体を下回り、現在はわずか5経営体が残っているに過ぎない。生産額も現在では、年間1,000万円から2,000万円程度ということだ。

草津市志那町にある平湖は、日本における淡水真珠養殖発祥の地である。最盛期には町内の半数以上の住民が真珠養殖に携わっていたらしいが、現在は一人の方が続けておられるにすぎない。草津市は、地域振興と伝統産業の復興を目指して2012年から予算を計上し、平湖に隣接する柳平湖にて真珠養殖を試験的に実施することにした（写真1）。私と浦部教授は、微力ながらそのお手伝いをしているところである。調査依頼は、柳平湖が真珠母貝の生育環境として適しているか評価することであり、水質、



写真1 対岸に比良山を望む柳平湖の風景。左奥に立つ杭が真珠養殖棚。

プランクトン、そして真珠母貝の成長についてモニタリング調査を行っている。

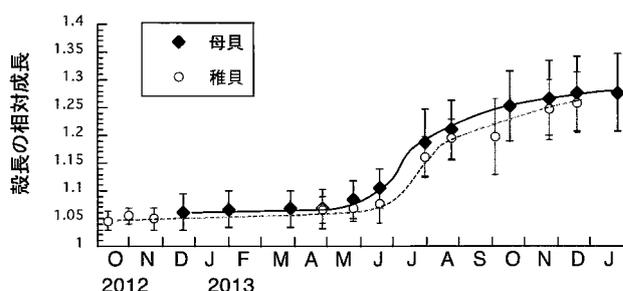


図1 2012年10月10日～2014年1月23日の柳平湖における、イケチョウガイ殻長の相対成長。母貝とは実験開始時に生後3年を経過していたもの、稚貝とは実験開始年に生まれたものを云う。

2012年の9月から始まった試験的な真珠養殖は、ちょうど1年と半年を過ぎたところだ。真珠母貝は順調に成長を続け、開始時より殻長で3cm程度大きくなった。興味深いことに、貝の成長は6月から10月の5カ月間に限られ、あとの7カ月間は全く成長しない(図1)。冬の成長停滞は低温のためだが、春に成長が遅れるのは餌である植物プランクトンの繁殖と関係しているようだ。一時は最も重要な水産資源のひとつであったはずなのに、イケチョウガイの成長や再生産、あるいは過速度に関する研究は、それほど多く存在しない。また、真珠母貝であるイケチョウガイは大量斃死による供給不足を補うために、中国から輸入された近縁種のヒレイケチョウガイとの間で交雑種が作られ、現在は改良母貝と呼ばれるこの交雑種が真珠母貝として利用されている(写真2)。この交雑種に関する研究例もまた極めて少ないのが現状なのだ。我々の調査・研究が、将来の養殖事業に大いに役立てば幸いである。

さて、事業は今年で3年目となる。真珠ができるまでにおよそ3年とのお話なので、売り物になる真珠が採れるのは、まだ1年以上先の話だが、母貝の順調な成長は良好な結果を期待させる。実は、昨年秋に試しに真珠を取り出してみた。やはりまだ小さいが、きれいに輝く真珠が採れた(写真3)。志那町では真珠養殖をしていた方々も廃業してすでに30年以上が経過しており、肝心の真珠の核入れ技術の

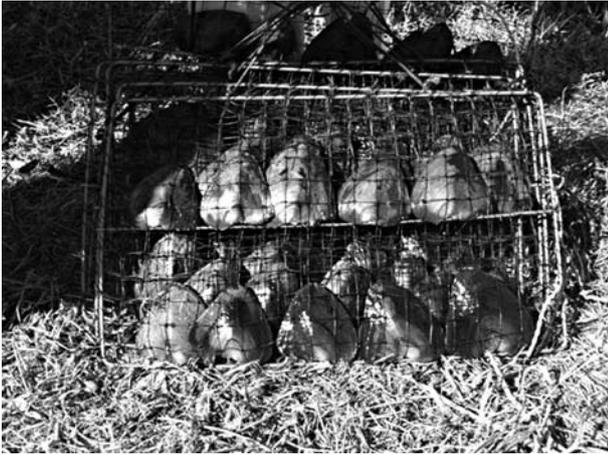


写真2 養殖試験事業に使っている改良母貝（イケチョウガイ×ヒレイケチョウガイ）。カゴに入れて水面下1mに縦向きに垂下する。

継承が大きな問題として立ちはだかっている。経験者はもう皆さんずいぶんのお年で、さらに30年以上のブランクと改良母貝（昔はイケチョウガイ。貝殻の形状と外套膜の厚さなどが若干異なるらしい）が久しぶりの施術作業を難しくしているようだった。それでも、いにしえの記憶を頼りに、一昨年秋と昨年秋に、町内会の人たち自らが通算で200個の母貝に核入れ作業を行った。大きく宣伝した甲斐あって各種マスコミの取材もあり、また草津市長も見学に訪れた。中学生になるお孫さんたちも施術に参加しての大盛況であった。これが数年続けば、徐々に技術も継承されて行くのかもしれないが、市の事業としてではなく、誰かが養殖業を始める決意を固めなければ、次の一步は始まらない。どうなることか。あと1年、モニタリング調査を続けながら、事業の行く末を見守ることにしたい。誰か真珠養殖始めてみませんか。

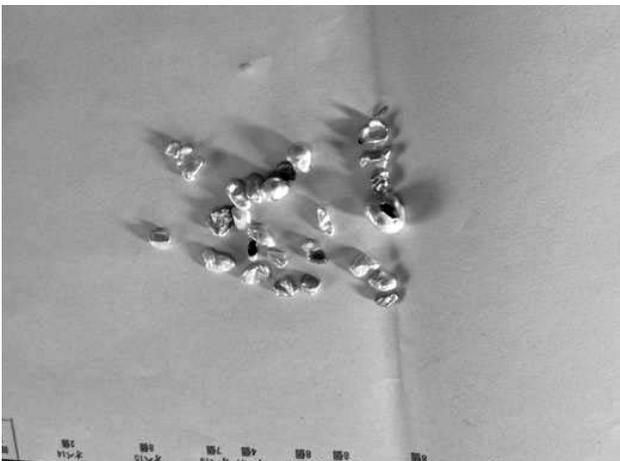


写真3 母貝から取り出された1年目の真珠。まだまだ小さいが美しい光沢を放つ。